

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：82619

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23500319

研究課題名(和文)古筆切紙背の史料学的研究

研究課題名(英文)Paleographical study for reverse-side writings in the back of fragmentary leaves of old codex

研究代表者

田良島 哲(Tarashima, Satoshi)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部調査研究課・課長

研究者番号：60370996

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：この研究で申請者は、江戸時代以来の古筆尊重の伝統の中で作成された手鑑に貼り付けられた典籍や文書・記録の断簡(「切」)を素材とした。切の裏面にも別の典籍や文書が存在する場合には着目し、原品や複製を参照してその実例を網羅的に収集した。

切の裏面は一次的な利用と二次的な利用とがあるが、古文書学で言う「紙背文書」の概念を応用して分類し、その伝に関する研究についても新たな方法への手がかりを見出すことができた。

研究成果の概要(英文)： In this research project, The applicant used the fragmentary leaves of old codex, documents or diaries put on "leaf albums" created in the tradition of the old-writings respect since the Edo period as resource for study, and have paid attention to writings existing in the back of of the leaves. The examples were comprehensively collected with reference to the original articles and the duplicates.

Writings on back of leaves are grouped to primary used ones and secondary ones. It has become clear that the concept of the "reverse-side document" used in paleography is able to be applied, and some keys to a new method for studying historical transmission of surviving leaves.

研究分野：古文書学、史料情報学

科研費の分科・細目：情報学 人文社会情報学

キーワード：紙背文書 古筆 断簡 古典籍

1. 研究開始当初の背景

「古筆切(こひつぎれ)」は和歌集や物語の古典籍の一紙、一丁(1ページ分)や歴史上著名な人物の筆跡などの一部を鑑賞のために切断したもので、江戸時代に古典に対する尊崇が広く社会に広まったことを背景に行われた習慣である。古典籍を「切(きれ)」とすることは一方で典籍の当初の姿を損なうが、その一方で部分的に分散して保存されることによって、災害などのために一挙に消滅する危険が回避され、一部にせよ典籍の保存に寄与した側面が認められる。またそれぞれの「切」は掛幅やアルバム状の「手鑑」に仕立てられ大事に保存されたため、比較的良好な保存状態で伝来したことも指摘できる。

古筆切の多くはその筆跡が尊重されてきたため、書道史研究・創作の素材とされるとともに、元となる歌集や王朝物語は古典文学研究の資料として活用されてきた。

しかし、「切」の中には少なからず古文書としての性格を持つ事例があり、さらに料紙の両面に墨書があって、歴史的により複雑な成立事情を含む場合が見受けられることが予備的な調査で明らかになってきた。

本研究は、このような文書としての「切」の研究の一環として計画したものである。

2. 研究の目的

古筆切の裏面(紙背)には、典籍や記録の断簡が見られることがある。判読の困難という要因もあり、これまで学術的に注目されることがほとんどなかったが、デジタル画像処理技術の普及によって、紙背の内容を把握することが可能となってきた。

この研究は、既知の手鑑等に収載されて伝わった希少な「切」の中から紙背に記載を持つものに対して下記の調査研究を実施し、その史料学的な評価と研究の方法を確立することを目的とした

- (1) 紙背を持つ古筆切情報の網羅的収集
- (2) 紙背を持つ古筆切の伝来形態の分析
- (3) 紙背を持つ古筆切の史料学的な意義の考察。

3. 研究の方法

(1) 調査方法確立のために、古筆切原本の精査および基礎的なデータの検討を行った。東京国立博物館(東博)で所蔵または寄託の手鑑類について紙背を持つ古筆切を確認し、紙質、形状等の書誌的データを検討した。

(2) これらの手鑑類について、デジタルカメラによる高精細画像を作成した。

(3) 東博以外で所蔵される手鑑についても可能な範囲で、調査と高精細画像の作成を行った。

(4) 影印本や展覧会カタログなどの二次的な資料に関するデータの収集を行った。この作

業は大学院生の補助者に必要なデータの収集を依頼し、約460件の事例を得た。不足する情報については複製本等を購入して補足した。

4. 研究成果

(1) 紙背を持つ切の伝来

現在見られる古筆切の裏面に墨書や墨摺がある場合、その伝来は現在の表面が一次利用面(より古い筆跡等)か二次利用面(一次利用面の目的が終了した後、裏返して書かれた面)かによって、その性格が異なる。

第一は、現在の表面が二次利用面である場合で、この場合多くは二次利用面である典籍等が尊重・重視されて切に分割されたものである。

たとえば伏見天皇自筆の筆跡として知られている「広沢切」は具注暦(手写された暦)や書状を裏返して歌集の草稿が書かれているものがある。この場合は二次利用面(天皇の筆跡)が尊重されて現在に至っているわけで、このような場合、現在の裏面(一次利用面)を「紙背文書」と呼ぶことが古文書学では通例となっている。

第二は、現在の表面が一次利用面である場合で、こちらが今回の研究の主対象となるものである。

この場合、古文書学的には一旦、その役目を終え、一度裏返されて別の目的のために利用された料紙が、再度裏返されて一次利用面が表面となり「古筆」としてよみがえったものと言える。今回の研究において不十分ではあるが実例を多く収集することによって、多少の特徴をつかむことが可能となった。

(2) 紙背を持つ切の実例

A. 紙背に経典を持つ場合

二次利用面(現在の裏面)に写経または摺写経(板木による印刷)を認める切が少なからず存在する。

京都国立博物館所蔵の国宝「藻塩草」に含まれる「播磨切」(図1)は鎌倉～南北朝時代の護良親王の筆跡と伝えられるが、紙背に摺写経が認められる。また同じ「藻塩草」所収で伝性空とされる「浅野切」の紙背も法華経と見られる摺写経であり、他の手鑑にも同一の法華経を紙背に持つ書状の切が知られている。

故人の筆跡になる書状や、法会の結縁者の筆跡のある料紙を裏返して経典を書いたり、摺写したりする例はすでに知られており、たとえば京都府向日市の北真経寺・南真経寺が所蔵する鎌倉時代の法華経(重要文化財)は、尊性法親王(1194-1239)自

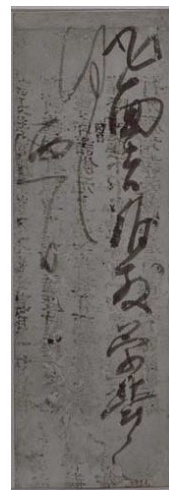


図1 播磨切

筆の書状を裏返して書写したものである。紙背に経典を持つ切は、このように経典や聖教が解体・分割したものであることが想定されるのである。

近年では仏典のデータベースが発達しているので、経文を突き合わせることによって、ばらばらの切同士の間接関係をつきとめ、切の集積である当初の文書群の歴史的な性格を推測することが可能となる。

イ．同一の手鑑に貼り込まれた同一の典籍の切

一つの手鑑の中に明らかに同じ典籍の断簡を紙背に持つ複数の切が含まれる場合が確認された。その多くは筆者不詳の書状で、手鑑ではたとえば「西行」といった伝称筆者が充てられている。

東京国立博物館所蔵の手鑑（所蔵品番号 B-13）に、このような事例を見ることができ

る。図2はこの手鑑の中で永円という僧侶の筆

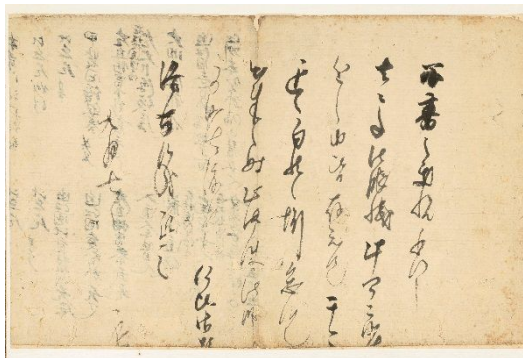


図2 手鑑のうち 伝僧正永円書状

とされる書状であるが、真ん中に縦の折り目があり、料紙の下辺が断ち落とされている点から、元は表面を裏にして袋綴じにされていたことが明らかである。紙背を確認してみると、平安時代の往生伝である蓮禅撰「三外往生伝」の写本の目次部分であることがわかる。

ところが同じ手鑑に含まれる鎌倉時代の解脱房貞慶を筆者として宛てる書状も、全く同じ寸法と体裁を持っており、同一の典籍を

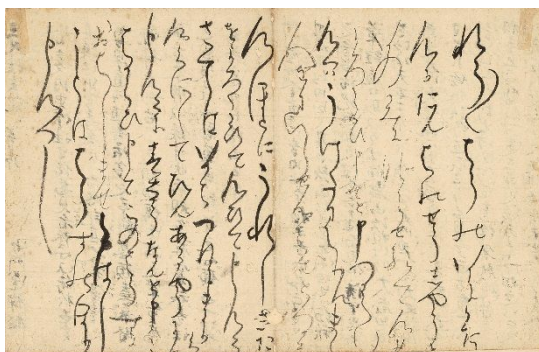


図3 手鑑のうち 伝僧正貞慶書状

解体したものであることが外形的にも明白である。かつ画像を反転して紙背を読んでも

るとやはり「三外往生伝」の本文である。同様の事例がこの手鑑の中になお2点確認された。

この事実は、江戸時代以降に手鑑が制作された際に典籍の写本の少なくとも一部がまとまって手鑑制作者の手元にあったことを示唆している。すなわち手鑑の制作に当たって制作者は、紙背に書状のある典籍を利用して、それにふさわしい筆者名を充てて、手鑑の各所に配置したのである。

同様の事例として、文化庁所蔵の古筆手鑑においても、紙背のある4点の切の体裁が一致するものを見出している。以上の経緯が推定可能であるならば、解体された古典籍の伝来について、手鑑の制作という局面までを含めた新たな知見を得ることができよう。

また、これまでの古筆研究の中でこの種の筆者不詳の書状類は、歌集のように同一典籍、いわゆる「ツレ」がなく孤立した存在で、取り扱いつらい存在であったが、紙背との関連で見れば、歴史的な伝来関係を推測できるケースが想定され、今後の研究の進展に寄与することが期待できる。

(3) デジタル処理による紙背の判読

近年まで、裏打ちされたり貼り付けられたりした切の紙背の判読は鏡を利用するなど、技術的にも困難で、写真による処理も手間がかかったが、デジタル画像を利用すれば比較的やすく紙背の可読性をあげることが可能となった。今回十分な実験は行えなかったが、今後実用的な処理ができる可能性をつかむことができた。次ページの図4,5にあげたのは、東京国立博物館所蔵の手鑑「桃花水」所収の切を反転・コントラスト等の処理を行って、読みやすくした事例である。

5. 主な発表論文等

〔図書〕(計1件)

田良島哲「信仰と書」

東京国立博物館特別展図録『和様の書』, 2013-07.

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田良島 哲 (TARASHIMA, Satoshi)

独立行政法人国立文化財機構 東京国立博物館 学芸研究部 調査研究課長

研究者番号: 60370996

(2) 研究分担者

なし

(3)連携研究者
島谷 弘幸 (SHIMATANI ,Hiroyuki)
独立行政法人国立文化財機構 東京国立博物
館 副館長
研究者番号 : 9 0 1 7 0 9 3 5

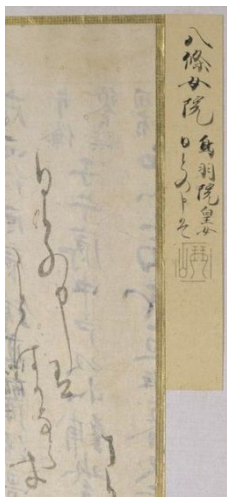


図 4



図 5 反転画像